

# ペンギンとイヌ

連載第3回

いちろ まみ

あらすじ

ペンちゃんは、南極大学から日本のある大学に留学中。この物語は、ペンちゃんと相棒のイヌが織りなす不思議なお話。

## 第5話 イヌのブタ疑惑

ある日、ペンちゃんは気づいてしまいました。

「わっふふふふ、フゴッ、わふふふふ」

イヌは大笑いすると、時にブタ鼻になるのです。

学生でゴった返しているお昼の学生食堂で、ペンちゃんたちは食後のおしゃべりを楽しんでいました。みんなが席を立ち始めたとき、ペンちゃんは怪しまれないように背後からイヌに近づきました。ひれをくちばしに当ててひそひそ声でさやきます。

「……………イヌはブタペギ？」

するとイヌが答えました。

「イヌは日本語よく分からんわふ」

イヌは都合が悪くなると、すぐこんなふうに言ってごまかします。ますます、ペンちゃんの謎は深まるばかり。イヌは見た目は犬でも、中身はブタなのではないか……………。

ある夜、イヌがペンちゃんのアパートを訪ねてきました。ドンドンドン。

ドアの向こうでは、イヌがぼろぼろと涙を流して立っていました。

「キューン、ペンちゃん……………、ぐずっ」

驚いたペンちゃんは慌ててイヌを部屋に入れてあげました。イヌは部屋に入ったとたん、泣きながらペンちゃんに飛びついてきました。目からは相変わらず大粒の涙がこぼれ続けています。ペンちゃんはひれでイヌの頭をよしよしなでながら言いました。

「何で泣いてるペイ？」

イヌが答えました。

「ぐずん、5限で隣に座った人に筆箱とられたわふ……………」

そう答えると、イヌはまたペンちゃんのふわふわした胸に頭をうずめます。

隣の人とイヌの持っていた筆箱が良く似ていたのです。隣人は自分の筆箱をかばんにしまったことを忘れて、イヌの筆箱まで持って行ってしまったようです。

「気づかなかったペイ？」

「寝てて、授業が終わったことも分からなかったわふ」

泣いていたイヌは、ペンちゃんのひざの上に丸くなっていつの間にか眠ってしまいました。

「風邪ひくべき」

ペンちゃんはイヌを起こして、ベッドに連れて行きました。ベッドに入ったイヌはふとんをかけられると、すぐにグーグーといびきをかき始めました。

「よっほど眠かったべきね。明日になったら忘れてるべい」すると、グーグーと一定のリズムで鳴っていたいびきが突然止まりました。シーンとした部屋の中、ペンちゃんがベッドを見ようとしたそのときです。

「フゴッ」

またイヌの鼻がブタになりました。ペンちゃんは目をかっとなき、イヌを見つめました。

グーグーと一定のリズムでいびきが始まりました。

「……やっぱり、ブタがイヌのふりをしているべき」

ペンちゃんはそれ以来ずっと、イヌのことをブタだと思っています。

しかし、イヌが言ってきたくれるまで、ずっと待つつもりでいるようです。

## 第6話 子猫を拾う

ペンギンのぺんちゃんは、大学からアパートに帰っていました。

ぺたぺたぺたぺた。今日の夕ご飯はなに作ろう。ぺたぺたぺたぺた。

公園から、突然、慌てた様子で女の人が出てきました。何度か振り返りながら歩き、肩にかかったかばんを直してまた振り返り、駆けるように小走りです。ぺんちゃんはもしかして公園に変質者が出たのではと思い、早歩きで通り過ぎようと思いました。公園をちらりと見ると、大きな白い猫が歩いてきました。まるで、去っていった女の人の後を追うようです。

「なんだ、猫ペギ」

ほっとした様子で、ぺんちゃんはアパートに戻りました。ぺんちゃんがドアにひれをかけたとき、後ろでミヤアと鳴く声がありました。振り返るとそこには、小さな赤ちゃん猫が首をかしげて座っていたのです。

「どこから来たペい？」

ぺんちゃんはしゃがんで、子猫の目線に合わせました。大きな瞳で見つめながら、子猫はミヤアと鳴くばかり。そのとき、キュルルルルと音がしました。お腹の鳴る音です。ぺんちゃんでした。

「お腹すいたペギ。寄っていくペい？」

ぺんちゃんは部屋の中に子猫を入れてあげました。ぺんちゃんが雨戸を閉めようと、部屋の窓を開けると、子猫はカーペットの上でごろんと寝ころがり背中をなすりつけ始めました。

「あつ、こら！ 毛がつくペギー！」

ぺんちゃんはずいぶん、子猫のおしりをひれで叩いてしまいました。子猫がサツとぺんちゃんの顔を見上げました。瞳がだんだんとうるみ始めます。

「ペギい、ごめんペい。わざとじゃないペい」

ぺんちゃんは慌てて、子猫を股の間に挟もうとしました。ペンギンはこうして子どもを温めるのです。踏まれる、と思った子猫は猛然と窓の方へ駆け出しました。

「あつ、待て！」

窓から飛び出した子猫は、ちゃんと庭に着地して今にも駆け出そうという様子。ぺんちゃんは玄関から回って、子猫の背中を追いかけ始めました。

ぱつと子猫が入った路地をぺんちゃんもついていきます。塀の間の暗い隙間を、どんどん追っていきました。水のない溝の間を走る子猫を上からのぞきながら、ぺんちゃんは溝の隣をよこ歩きで進んでいきます。溝から出た子猫が右に曲がると、ぺんちゃんも右、左に曲がれば、左。すると突然、中央に大きな木があるだけの、何も無い広い原っぱに出ました。

木の根元に、公園で見かけた大きな白い猫がいました。追

ってきた子猫がその猫の後ろでちょこんと座っています。ペンちゃんが近づいていくと、白い猫が言いました。

「あんた、うちの子に何したの？」

白い猫は目を三角にして、ギラギラとにらみつけてきます。そしてときどき、フーツという声を出します。

「いや、何……」

ペンちゃんの言葉をさえぎるように、白い猫が叫びました。「焼き鳥にして食うぞ、このヤロウ！」

ぺひいっ、と悲鳴を上げてペンちゃんは来た道を走って逃げようと思いました。つかまったらあの鋭い爪で押さえつけられ、ペロりと食べられてしまいます。ちょうどそのときでした。

「ペンちゃん、何してるわふー？」

しっぽを振りながら、イヌが原っぱの向こうから走ってきました。

「イヌ！」

すると、イヌの姿を見た瞬間、猫が毛を逆立てて戦闘体制に入りました。

フーツ！ フーツ！ 爪を立てて、子猫を守ろうとしているようでした。ペンちゃんは近づいてきたイヌに言いました。

「イヌ、逃げるよ」

「わふ？」

ペンちゃんはイヌの背中に飛び乗ると、イヌのおしりを競馬のジョッキーのように叩きました。

するとイヌはぺたんとお座りしてしまいました。

「ちがうちがう！ 走るべきー！」

「わふ？」

よく分からないまま、イヌは走り出しました。ペンちゃんが通常走るよりも何倍も速く駆けていきます。

ビューン、ビューン。ビューン、ビューン。ズボツ。ベチャツ。

ビューン、ビューン。

細い道では、イヌの大きな体はときどき足をすべらせて溝にはまってしまいます。

通りに出ると、ペンギンに乗せた犬が走っていくので、すれ違う人々みんなが振り返っていました。

そうこうしながら、ようやく2匹はペンちゃんの家の前までたどり着きました。

「ありがとうぺい。イヌのおかげで焼かれずにすんだべき。ところで、イヌはあそこで何してたぺひ？」

するとイヌが答えました。

「家に帰る途中に、道に落ちてたソーセージのかけらを食べたら、そのちよつと前にまたかけらがあって、そのまた前にもかけらがあって……。うーん、よく分からんけど、あそこにいたわふ」

2匹のお腹が同時にキュルルルと鳴りました。

「ご飯、食べていくぺひ？」

「わふ！」